竜の子奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER

その夢は、きっと世界を変えていく。

The dream surely changes the world.

第47回交流会レポートより（唐津城）

Contents

P.2　「現在の夢」、お礼の言葉
P.3　第47回交流会レポート
P.7　竜の子近況報告
P.11　竜の子（OB･OG）近況報告
P.12　SPECIAL REPORT Ⅰ

SPレポートⅠより（ランタン村の再建された家屋と背後の山々）

P.14　SPECIAL REPORT Ⅱ
P.16　寄付者紹介・編集後記

第34号
Mar. 2025

公益財団法人 竜の子財団

現　在　の　夢

アズハニ ビンティ イスマイル

マレーシア出身
家族：15歳と13歳の息子二人
2003～2007：
東京工業大学（学部―化学工学）
2007～2009：
東京工業大学（大学院―応用化学）、竜の子奨学財団―1期生
2009～2011：
信越ポリマー（マレーシア）
2011～2012：
マラヤ大学（化学の先生）
2013～現　在：
DHL Asia Pacific Shared Services（DHL Express Japan & Asia Pacific のファイナンス、チームリーダー）

第一期竜の子奨学生のアズハニと申します。2007年に竜の子財団と出会えたおかげで私の一つの夢が叶いました。日本の大学を卒業し、新しい人生のステージへと踏み出しました。あの頃は学生から社会人になりどのような生活していいのか、どのような期待を持てばいいのか正直不安もありましたが楽しみにもしていました。

それから15年後の私は、かつて自分が想像もしなかったような場所に立っています。あの時思い描いた将来像が数年後には違ったものになっています。応用化学を勉強した私はファイナンス分野にて働いています。しかし、それは決して無駄や悪いことではなくむしろ自分が成長し、新しい可能性に気付いた証拠だと思っています。時が過ぎ、私たちが成長するにつれて、もっと多くの責任が生まれます。それと同時に夢も変わっていきます。今は何よりも自分の好きな仕事をしながら、心身ともに健康で充実した毎日を送ることです。自分が一人の女性であることを忘れずに母親、娘、社員として夢を叶えるために一生懸命頑張っています。

私の現在の夢は自分自身の仕事だけでなく、他の人々がその可能性を最大限に引き出せるようにサポートするリーダーとして、より高いポジションに昇進することを目指しています。また、社員として母親としてのバランスの取れた生活を送りながら、子供たちと一緒に世界を旅したいと思っています。竜の子奨学生だった時と同じように他国の人々と交流し、さまざまな文化を子供に体験させます。子供だけではなく両親のためにも支え、身体的にも経済的にも支援していきたいと思っています。

最後に一つ伝えたいことがあります。それは「完璧を求めすぎないこと」です。社会に出て時には失敗し、挫折することもあります。しかし、それは恥ずかしいことではなく成長のチャンスです。失敗を恐れて何もしないよりも挑戦し続けることのほうがはるかに価値があります。私も何度も失敗を経験しましたが、それがあったからこそ今の自分がいます。16年前の私は、未来の自分がどんな人生を歩んでいるのか想像もできませんでした。今こうして「現在の夢」を持ち続けていることが何よりも幸せなことだと思います。

ご寄付いただいた皆様へ

この度、竜の子奨学生を代表して、多大なるご支援を賜り心より深く感謝申し上げます。

皆様の温かいご寄付により、私たちは経済的な不安を抱えることなく学業に専念できております。金銭面でのご支援だけでなく、財団の交流会を通じて日本文化に触れる機会をいただき、日本に対する理解を深めております。また、他国からの留学生と交流し、異文化への視野を広げるとともに、互いに良い刺激を受けながら成長しております。私たちが恵まれた環境で努力を重ねられるのは、皆様のご支援のおかげに他なりません。

私たちはこの恵まれた環境を最大限に活かし、より一層学業に励んでまいります。そして将来、皆様からいただいた温かいご支援を忘れずに、社会に貢献できるように努めてまいります。

皆様のご支援に改めて深く感謝申し上げます。皆様のご健康と幸福を心よりお祈り申し上げます。

（令和５年度竜の子奨学生　東京工業大学　金 栄牛）

第47回交流会レポート

今和6年7月27日～7月28日、竜の子奨学生の第47回交流会が九州の福岡県と佐賀県で行われました。1日目は福岡県の柳川藩主立花邸で資料館を見学、そこで昼ご飯を食べました。午後は太宰府市学府にある大宰府天満宮を回って日本の歴史に満ちた神社を満喫しました。2日目の午前中は佐賀県の唐津城で海を眺め、唐津神社を見学し、曳山という祭りに使われた山車を見ました。午後は唐津焼体験をして、自分ならではの焼き物を作りました。忙しい学校生活から抜け出し、とても楽しい時間を過ごしました。

私は７月27日の交流会の当日、５時35分頃に羽田空港第２ターミナルに着き、６時20分に竜の子財団の皆さんと合流し、日程表を受け取りました。少し早い時間ではありますが、全く行ったことのない九州での交流会について、楽しみでならなかったのです。９時頃飛行機で九州の福岡空港に到着し、まず訪れたのは柳川藩主立花邸御花でした。柳川藩主立花邸は日本の福岡県柳川市にある歴史ある建築群で、約400年前に遡り、貴重な文化財です。江戸時代において、立花家の第５代藩主である立花貞俶が、側室や子息たちの住居を柳川城の近く、現在の御花の場所に移転させました。この地域は「御花畑」と名付けられ、後に現在の屋号「御花」になりました。御花には「松涛園」（国指定名勝）、「西洋館」（迎賓館）や「大広間」（100畳の大きな部屋）など、いくつかの歴史建築や文化施設が含まれます。

西洋館

緑が豊かな庭園は、夏の暑さを少し和らげてくれました。古き良き武士の家の雰囲気が漂う中、歴史の奥深さに感激しました。立花邸の本館に入り、古い建物の内側では、冷んやりとした空気が流れ、夏の暑さから一時逃れる場所でした。柳川地方独特の「さげもん雛飾り」も堪能しました。柳川地方に伝わる「さげもん」とは、お雛様の段飾りと一緒に、天井から下げられる沢山の色鮮やかな手毬や人形といった飾り付けです。「柳川雛祭り　さげもんめぐり」の時期ではないですが、「さげもんめぐり」をした気分です。また、館内を歩きながら、藩主や家族が過ごした時代を想像することができました。竜の子財団の皆さんと歴史に満ちた御花の中のレストランで、お昼ご飯に鰻を食べました。

さげもんひな飾り

お昼ご飯を食べた後、竜の子財団の皆さんと一緒に柳川の川下りをしました。柳川は、筑後川という川を通じて、美しい水郷風景を楽しむことができる場所です。竜の子財団のおかげで、奨学生たちとこんなに綺麗な景色、面白い川舟の旅を経験することができました。真夏の中、風が吹き抜けると、柳の葉が揺れて素敵な音が聞こえ、アオサギなどが川面を優雅に泳ぐのを見て、心身ともに癒されました。舟の船頭は、地元の方で、丁寧に案内をしてくれました。柳川という場所は、心休まる空間であり、また、日本の伝統的な美を感じることができました。

午後は、太宰府天満宮に訪れました。太宰府天満宮は、福岡県太宰府市にある有名な神社で、学問の神である菅原道真を祀っています。到着した太宰府天満宮は、静かで荘厳な雰囲気に包まれていました。境内では、新緑の木々が涼しい風を運んでくれ、夏の暑さが少し和らぎました。参道には、各地から来ているお客さんが並んでお参りをしていました。

柳川の川下りにて

太宰府天満宮

太宰府天満宮の歴史は、西暦919年に遡ります。菅原道真は、政治的な理由で太宰府（当時九州の行政機関）に左遷され、そこで亡くなりました。道真の死後、連続する災害が起こり、それが道真の怨霊の仕業だと信じられ、彼の魂を慰めるためにこの神社が建立されました。時間が経つにつれて、太宰府天満宮は学問と文化の守り神として知られました。竜の子奨学生の皆さんも一人ずつお参りをして私は学業の成功を祈りました。

その後の晩ご飯では、宿泊場所である博多区へ移動して、博多名物の水炊きを食べました。博多の水炊きは鶏肉と地元の野菜が使われ、現地の味を堪能できました。真夏に温かい透き通った一汁が心を癒しました。晩ご飯を食べた後に、奨学生の金さんが誕生日であることを知り、皆さんと一緒に金さんの誕生日を祝いました。特に竜の子財団のほうで予め誕生日ケーキを注文していたので皆で一緒に食べました。この中にも竜の子財団の温かさを感じました。

お誕生日祝いされる金 栄牛さん

その後は、博多名物である中州の屋台を巡り、たくさんの屋台が見られて、とても楽しい１日を締めくくられました。

（担当：令和６年度竜の子奨学生　一橋大学　宋 兆）

一晩の休息を終え、新しい一日が始まりました！７月28日の朝ですが、太陽が昇ってもまだあまり暑くなく、爽やかな天気で気持ちが良いです。福岡の西大橋で、川の上を流れる涼しい風を感じながら佐賀県行きのバスに乗り、２日目の旅が始まりました。バスが走り出すと、福岡のにぎやかな街並みが少しずつ後ろに離れていきます。車窓から

福岡の西大橋の朝

外を見ると、青々とした山がたくさん広がり、目に入る景色はすべて生命力に満ちています。田園の景色は緑が多く、平和で穏やかな雰囲気が漂っています。こんな景色を見るだけで、疲れた心が癒され、自然と心が落ち着きます。

本日の最初の目的地は、唐津の象徴とも言える唐津城です。このお城は、1602年に豊臣秀吉の家臣・寺沢志摩守広高によって作られ、当時の技術や労力をたくさん使って、約７年かけて完成しました。唐津城は別名「舞鶴城」とも呼ばれ、その美しい外見と海に面した独特な場所が、たくさんの人を惹きつけています。

唐津城

唐津城に着くと、まずその立派な姿に圧倒されました。城内に入ると、そこには戦国時代から江戸時代までのたくさんの歴史的な展示物があります。武士の生活や当時の文化を少し見ることができ、それぞれの展示物が話す物語に心を惹かれました。刀や甲冑は、その細かい作りに驚かされ、当時の技術の高さを感じました。地図や古文書は、歴史の記憶を残しており、それらを見ることで、当時の人々の生活や考え方を少し想像できます。

また、唐津城の見どころの一つは唐津焼の展示です。唐津焼は江戸時代から続く伝統的な陶芸で、その素朴で温かいデザインが特徴です。展示室に入ると、茶碗や花瓶、皿などの唐津焼の作品が並んでいます。それぞれの作品には、職人のこだわりが入っており、細かいところまで丁寧に作られています。茶碗の釉薬の色は薄く、光を受けて少し光っていて、手作りの跡が感じられます。これらの作品をじっくり見ているうちに、唐津焼が持つ独特の魅力に惹かれ、午後に予定している唐津焼の体験がもっと楽しみになりました。

天守閣に登り始めると、階段を上るたびに、歴史の雰囲気が漂っており、古い木材の香りがします。一番上の階に着くと、360度の素敵な景色が広がります。目の前には、広がる青い海と青空がつながり、海風が頬をなでるように吹いてきます。唐津の町並みが見渡せて、古い建物や新しいビルが一緒にあり、歴史と現代が混ざった独特の風景が見られます。ここから見る景色は、唐津の歴史を支えてきた自然の豊かさを感じさせてくれます。数百年前の人々も同じ海風を感じ、遠くの海と山を見守っていたのだろうかと、しばらく考えました。目の下には唐津の町が広がり、歴史の重さを感じながら、その美しい景色に心を奪われました。

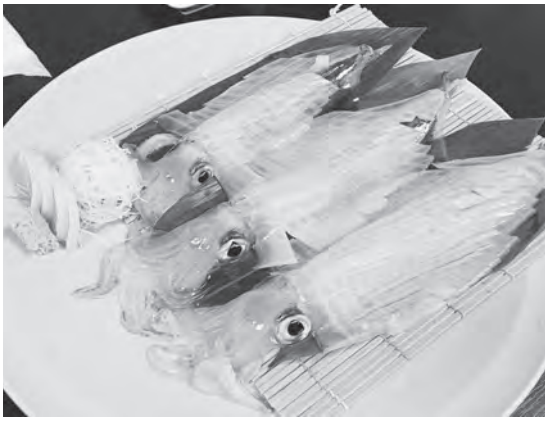
唐津城の天守閣から見た景色

次に、国指定重要無形民俗文化財「唐津くんちの曳山行事」を見学しました。唐津くんちは毎年唐津神社の秋祭りのことです。「くんち」という言葉は、「供日（くにち）」が九州の方言で変わったもので、九州北部では秋祭りを「くんち」と言うことが多いです。唐津くんちの時に、華やかな曳山が唐津の城下町を廻ります。これらの曳山は、獅子、兜、鯛、飛龍などをモデルにしており、遠くからでもその細かい作りが感じられます。作るのに約３年かかるそうで、職人たちの技術と努力が詰まっています。１台の

唐津くんちで使う曳山

曳山は重さがおよそ２～４トンあり、祭りの時に、一台あたり200～400人の人が曳いています。見学した曳山展示場で、曳山が全部並んでいて、その大きさに圧倒されました。祭りの時、どんな素敵な光景になるのか、本当に気になります。

唐津といえば、港の町として新鮮な海の幸を食べられることで有名です。昼食には、地元のレストランで新鮮なイカの刺身を食べました。出されたイカは、透明で、神経反射で体に赤い斑点が光るのが、まるで生きているかのようでした。初めて見たこの光景に、本当に面白いと思いました。美味しい醤油とわさびを一緒にして口に入れると、最初に感じるのは海鮮ならではの甘さ、次に醤油の塩味とわさびのさっぱりした味が広がります。新鮮なイカはとても歯応えがあり、噛むとしっかりした食感が楽しめます。じっくり噛んでいくうちに、イカのもちっとした肉質が感じられ、とても深い味わいです。こんなに美味しいイカを食べられるなんて、海の恵みに感謝します。



昼ご飯で食べた新鮮なイカ

午後は、最も楽しみにしていた唐津焼の体験です。まず、唐津焼の先生が私たちを唐津焼の作品展示室に連れて行ってくれました。碗や皿、茶碗など、どの作品も地元の文化がたくさん表れていました。作品に描かれた細かい模様は手作りの跡を感じさせ、釉薬の色は薄く、光を受けて少し光っていて、先生が作品を作るときに入れた思いが伝わってきました。先生は、作品の背景や作り方について詳しく説明してくれ、唐津焼の魅力をもっと深く理解することができました。

次に、私たちは唐津焼の作り方を体験し始めました。今日の目標は、一人二つの飯碗を作ることです。先生がまず、土をこねる方法を教えてくれました。土をこねるとき、まるで自然と話しているかのような感じでした。土の感触が手の中で変わり、少しずつ形に近づいていくのが感じられます。最初に碗の底を切り出し、次に土を長い棒状にして、円を描くように重ねて碗の形を作ります。この工程では、少し我慢が必要です。隙間をしっかり押さえ、碗の壁を作っていきます。最初は少し下手で、土がうまく形にならないこともありましたが、周りの友達の助けもあり、だんだん慣れてきました。形ができた後、先生が私の碗の口を直して、細かいところまで上手に仕上げてくれました。先生の上手さに感心しました。

最後に、好きな模様を描く時間です。私は大好きな牛を描きました。模様を描くとき、心が集中して、時間の流れを忘れてしまいました。その後は唐津焼の焼成を待つことです。完成した作品を見ることができることを楽しみにしていました。

約３ヶ月後、加藤理事が焼き上がったものを渡してくれました。私が手作りした碗を家で見たとき、焼き上がった碗は私が作った時とは全然違っていました。焼いた後の碗はちょっと冷んやりとした感じがして、手作りした模様もそのまま残っていました。この体験を通して、唐津焼の魅力をもっと深く感じ、陶芸がもたらす静けさと満足感を味わうことができました。

自分で作った唐津焼（左：焼成前、右：焼成後）

こうして、唐津での一日が終わりに近づきました。唐津城の歴史を感じ、唐津くんちの文化を学び、唐津焼を通して創造の喜びを感じる中で、唐津という町が持つ深い魅力をたくさん味わうことができました。この旅を通して得た感動と新しい発見は、私の心に深く刻まれています。

竜の子財団の皆さんと過ごした２日間はとても楽しかったです。別れが近づくにつれて、まだまだ名残惜しい気持ちでいっぱいです。皆さんと一緒に過ごした時間は、私にとって大切な宝物になりました。ありがとうございました！次回の交流会でまた会いましょう！

（担当：令和６年度竜の子奨学生　名古屋大学　叶 楷文）

竜の子近況報告

bingo

具 世羅（クー セラ）（韓国）
東北大学

「私の近況報告」

この冬仙台ではたくさん雪が降りました。12月は知り合いと一緒にYMCAのクリスマスイベントに参加しました。ビンゴをして、プレゼントをもらいました。新しい人たちとも出会うことができました。

また、研究室では新年会がありました。今年もさまざまな新しい研究に取り組むことになりそうです。忙しくなりそうですが、竜の子財団の皆さんと一緒に頑張ります。

科学万博記念公園の銀杏並木

劉 楚帆（リュウ ソハン）（中国）
筑波大学

「静かにくつろいだ年末年始」

私は非常勤講師を務めている大学の期末テストを控えていたため、お正月は静かに過ごしました。

昨年は記録的な猛暑が続いたため秋の紅葉が心配でしたが、11月下旬に友人と科学万博記念公園を訪れると、銀杏並木が予想以上に美しく金色に染まっていました。訪れた日は天気も良く、落ち葉の絨毯を眺めながらゆっくりと散策を楽しみました。

実家のある中国南部は一年中暖かく季節感が薄いので、日本のようにはっきりとした四季の移ろいに魅力を感じています。

KABAバス

周 瑩樺（シュウ インファー）（台湾）
東京大学

「KABAバスに乗りました！」

お台場にあるKABAバスに乗りました！水陸両用のバスに乗るのは初めてで、東京湾にダイブするときは少し緊張しました。バスが海に入ると、東京湾の景色が一気に広がり、レインボーブリッジ、東京タワー、スカイツリーも見れて、とても綺麗でした。フジテレビ本社の特徴的な建物も面白かったです。ところで、乗車中にフジテレビの本社縦横の比は16：９であり、何の比から来ているのでしょうという問題を出されたのですが、皆さんは分かりますでしょうか？ちなみに、私はパワーポイントの縦横比を想像しました。

富士山と
象限儀座流星群

楊 若飛（ヨウ ジャクヒ）（中国）
東京海洋大学

「新年の始まりと精進湖での流星群」

今年の初めに、私は精進湖へ旅行に行き、象限儀座流星群を観ることができました。この体験は本当に忘れられない思い出となりました。流星群のピークは深夜だったため、その時間帯の山はとても寒く、車で向かっても寒さが身にしみました。流星群が現れるのを待ちながら、友達と車の中で縮こまり、談笑したり歌ったり、流れ星が現れたらどんな願いをかけるかを語り合ったりして過ごしました。寒さが耐えられず、車の外には約30分しか出ていませんでしたが、予想以上に流星群の活動が活発で、わずか30分で９つの流れ星を目撃しました。

私は写真撮影が好きなので、このチャンスを逃すわけにはいきませんでした。カメラは一晩中約4000枚もの写真を撮影し、富士山の朝日と夕日、さらには富士山と流星が一緒に写った貴重な写真も撮ることができました。

今年の新しい一年には、仕事が順調に進むことを願い、皆さんが素晴らしい一年を過ごし、願いがかなうことを心より祈っています。

燕市で食べた「燕背脂ラーメン」

金 栄牛（キム ヨンウ）（韓国）
東京工業大学

「新潟に行ってきました」

年末年始は風邪やインフルエンザが流行り、私の周りにも何人か病気になった人がいました。皆様はお元気でお過ごしでしょうか。

去年、学会発表で新潟県に行ってきました。お米と日本酒と魚とラーメンがおいしくて、海がきれいでした。

国内旅行でも自分が住んでいる所と全く違う雰囲気が味わえるのも、日本生活のいいところの一つだと考えました。

皆さんも機会があればぜひ行ってみてください。おいしいご飯屋さんもご紹介します。

東京タワーが見える六本木けやき坂でのイルミネーション

郭 錦表（カク クンピョ）（韓国）
東京工業大学

「冬はイルミネーション！」

日本の冬と言えば皆さんはどんな言葉を思い出しますか？

おでん、みかん、こたつ等、いろいろあると思いますが、私にとってはイルミネーションです。この綺麗な光たちは長〜い長い冬の夜を輝かせてくれて、見るだけで身も心も温まるような気持ちにさせてくれます。年末には青い洞窟、東京ミッドタウン、六本木けやき坂のイルミネーションを見てきました。この素敵な風景を皆様と一緒に味わいたいです。

「ごろきち」がうろうろしています

庄 睿翔（チョン ルイション）（マレーシア）
東海大学

「年末年始は忙しかったです」

私は小田原の旅館でアルバイトをしていました。年末年始はとても忙しくて疲れましたが、外国の観光客が多く訪れたおかげで、まるで世界旅行をしているような気分になりました。旅館の前には「ごろきち」という地域で愛されているのらネコがいて、寒い日も毎日餌を待ちながらくつろいでいます。今年１月でアルバイトを辞めたので寂しいですが、最後の日にごろきちが私を見送ってくれて、すごく嬉しい気持ちになりました。

厳島神社の大鳥居

戚 涵欽（セキ カンシン）（中国）
東京電機大学

「学会発表で広島に行ってきました」

学会発表のため広島に行ってきました。発表は無事に成功し、懇親会では他大学の学生と研究の話で盛り上がり、楽しい時間を過ごせました。発表後は同僚と厳島神社を訪問しました。大鳥居の荘厳さと、海に浮かぶような美しい景色に心を奪われました。発表の緊張感をリフレッシュできました。

最近は寒さが厳しくなってきたので、皆さんも体調に気を付けて、冬を乗り切りましょう。

伊豆の初日の出

宋 兆（ソウ チョウ）（中国）
一橋大学

「海での年越し」

今年の年越しは伊豆で過ごしました。内陸で育ってきた私にとって海のそばで新年を迎えるのは初めてでした。やはり波の音を聞きながら、2025年を迎えるのは心地よかったです。また、海を背景にした初日の出もとても綺麗でした。海に浮かぶ赤い太陽を見てこれからの一年の幸福と運をいただいた気がしました。その幸福と運も皆さんに送りたいと思います。

自分で作った「鶏公煲」（辛い鶏の鍋）

叶 楷文（ヨウ カイブン）（中国）
名古屋大学

「友達に囲まれている年末」

年末はいつも忙しいけれど、とても楽しいですね。年末には２つの学会に参加し、久しぶりにたくさんの友達と再会しました。また、学校の交流イベントやクリスマスパーティーにも参加して、新しい友達もたくさんできました。高校時代からの友達が日本に旅行に来て、一緒に食事をしました。こんなにたくさんの友達がいてくれるのは、本当に幸せだなって思います。

早く竜の子財団の皆さんと会いたいです。楽しみにしています。

リヨンで星の王子さまとのツーショット

鄒 可昕（ゾウ カシン）（中国）
京都大学

「充実した一年」

私は昨年、とても充実した一年を過ごすことができました。特に後期には、いくつかの学会に参加し、論文を発表しました。お正月休みにも友人と一緒に韓国旅行に行き、美味しい食べ物を満喫することができて、とても幸せでした。

また、先日健康診断を受けた際に、体調管理の大切さを改めて実感しました。寒さが厳しいこの季節、皆さんもどうか無理をせず、お体を大切になさってください。

2024年最後のハイキング

徐 萌陽（ジョ モヨウ）（中国）
九州大学

「冬の山で心を整える」

寒い冬が続いていますが、私は毎週末、山登りを続けています。冷たい空気の中での登山は少し大変ですが、自然の美しさや静けさに触れるたびに心が癒され、登頂したときの達成感に元気をもらっています。冬の山景色を眺めると、疲れも吹き飛び、とても充実した気持ちになります。

これからも体調に気を付けながら、自然との触れ合いを楽しんでいきたいと思います。皆様もどうぞお体にお気をつけください。

僕のシークレットサンタからもっらプレゼント（本人左）

ニムラウィー　ナッタパット
Nimrawee Nattapat（タイ）
九州大学

「シークレットサンタのサプライズギフトをもらいました!!」

皆さんはクリスマスとお正月を楽しく過ごせましたか？

クリスマスには、友達とシークレットサンタをしました。シークレットサンタとは、クリスマスシーズンに行われるプレゼント交換のゲームです。とても楽しくて、面白いプレゼントをたくさんもらいました！

学業の面では、学会用の論文を提出し、採択されました！ 3月に大阪で自分の研究について発表します。とても楽しみです！

とても寒くなってきたので、体に気をつけてくださいね。

私たちのチームがビジネスコンペティションのために制作した水彩画

ワナ　ホン
Wunna Hone（ミャンマー）
立命館アジア太平洋大学

「新年の始まり」

皆さま、新年の始まりはいかがお過ごしでしょうか。最近は寒い日が続いていますね。私は今、日本で初めてのビジネスアイデアコンペティションに参加しており、忙しい日々を過ごしております。このコンペティションに全力で取り組んでおり、良い結果を目指して頑張っています。このような形で新年をスタートできるのは、とても良い経験だと感じています。

最後に、全国的にインフルエンザが流行しておりますので、どうぞお体にお気をつけくださいませ。

12月に参加した学会の終了後写真

バル　タマン　アンウロデ
Bal Tamang Anurodh（ネパール）
立命館アジア太平洋大学

「学会、論文、そして就職活動 ― 忙しさの連続」

この数ヶ月間は本当に忙しい日々でした。昨年12月初めに学会があり、修士論文の初稿締切もありました。クリスマスの日にフィードバックを受け、1月に最終稿を提出しました。

次は就職に集中です。忙しい毎日ですが、健康を大切にしながら頑張りたいと思います。

大分では結構寒くなってきました。皆さんのところでも同じかもしれませんね。どうか暖かくしてお過ごしください。またお会いできる日を楽しみにしています！

（担当：令和5年度竜の子奨学生　東京工業大学　金 栄牛）

竜の子(OB・OG)近況報告

姉と甥子たちと
過ごした
クリスマス
（本人右上）

チャンポーンパックディ　インオン
CHANPORNPAKDI ING ON（タイ）
東海大学大学院　工学研究科　医用生体工学卒

「とても楽しんでいます」

私は現在、東京農工大学で助教を務めさせていただいています。学生時代の研究内容は人の脳機能の解明でしたが、最近動物の内面状態推定という研究テーマで新しい研究を挑戦しています。仕事で国内海外出張が多く、色んな場所に訪問する機会があって、とても楽しんでいます。12月にもタイに出張して少し家族と過ごせました。冬休みはカナダに住んでいる姉と甥子に会いに行ってきました。仕事は忙しいですが、プライベートも充実していますので、これからも頑張っていきたいと思います。

家族写真
（本人右上）

カク　テンテン
郭 甜甜（中国）
東京医科歯科大学大学院
医歯学総合研究科　分子遺伝分野卒

「完璧でないがベストを尽くす！」

2022年10月から、主人の海外駐在に帯同し、中国の上海に移住しました。一年後の2023年10月末に同国の北京に異動し、移住先も北京になりました。現在も北京で、長女、長男と主人の４人で、駐在生活の日々を送っております。幸運なことに、中国は私の母国でもありますし、子どもたちにとっては、母国語を学べる絶好のチャンスでもあります。

また、十年以上前から一人身となった70歳を過ぎた父親は、一昨年脳梗塞で体に後遺症が残ってしまい、介護が必要になりました。地元瀋陽の養老施設に預けて、近くにいる親族がみんなで面倒を見てくれています。私も近くなったため、日本にいる時に比べて、父親の面倒が見やすくなっています。

長いようで短い人生において、人は様々な課題をクリアしていきます。私の場合は、留学、就職、結婚、母親の最期、子育て、父親の介護…課題は一つ一つ重なっていて、どれも自分なりにベストを尽くしているようで、振り返ってみると、どれも悔しいところ、もっとこうすればああすれば良かったところが残ってしまいます。ところが、完璧でないのは人生の本質なのかもしれないです。分かれ道でどういう選択をして、どれぐらいの能力を発揮できるかは、運をのぞいて、若いうちに蓄えた知識や経験に比例します。これからの課題は、子どもたちの将来や自分の今後をいかにこの千変万化な世界にフィットさせていくかです。

今留学している後輩の方々、ぜひ竜の子財団のもとで、たくさん貴重な経験を積んで、人生の蓄えを豊かにしておいてください。

地元の名所
「趵突泉」で
撮影した一枚

グォ　チョンリャン
郭 中樑（中国）
東京大学大学院　理学系研究科　化学専攻卒

「趵突泉（ほうとつせん）に行ってきました！」

名古屋市に引っ越してから早くも４年が経とうとしています。現在、愛知県がんセンターの研究員として、研究、学生指導、論文執筆に追われる忙しい日々を送っています。年末年始には中国に帰省し、久しぶりに地元の名所「趵突泉*」を訪れました。正月の中国はかなり寒く、いろいろ着こんでいました。３月少し暖かくなったら、九州に行き、久しぶりに母校の高校を訪れてみたいと思います。

＊趵突泉は、中国山東省の省都・済南市の市街区にある70を超える自噴泉の中で最も有名な泉である。済南市にある文化的にも重要なカルストの泉であり、古くから「五経」の中の『春秋』でも言及されており、清朝の乾隆帝も「天下第一泉」と讃えている。

（担当：令和５年度竜の子奨学生　東京工業大学　金 栄牛）

SPECIAL REPORT Ⅰ

ランタン谷の旅：自然の美しさと防災の学び

昨年９月、大学の卒業論文研究のためにランタン谷へのトレッキング旅行に行きました。私の研究は、「山岳観光地域における地震への備えの調査：ネパール・ランタン国立公園のティーハウス事例研究」（英題：Investigating Earthquake Preparedness in Mountainous Tourism Destinations: A Case Study of Tea Houses in Langtang National Park, Nepal）と題し、ランタン谷トレッキングルート沿いのティーハウスの地震備えの状況を評価することを目的としました。ティーハウスはネパールのトレッキング観光の中心であり、基本的な宿泊施設と食事を提供することで、トレッカーや地域の生活にとって重要な役割を果たしています。

日本と同様に、ネパールは災害に対して最も脆弱な国の一つです。多くの災害に対する脆弱性の高い国として世界で20位にランクインし、地震、地滑り、洪水、気候変動などのリスクが高いのが特徴です。自然災害や健康危機、その他の社会経済的および政治的危機は、ネパールの観光産業に度々影響を及ぼし、観光業従事者や、いままでの開発に多大な被害を与えました。特に影響を受けやすい地域の一つが、私の研究対象であるランタン国立公園です。この地域は、首都カトマンズから約120キロ北に位置し、未開の高地にある聖なる湖と山々、多様な生物多様性、修道院、タマン族の文化が特徴で、世界中からヒンドゥー教や仏教の巡礼者、トレッカー、登山愛好家を引き寄せています。ランタン国立公園は、サガルマータ国立公園（エベレスト）やアンナプルナ保護区に次いでネパールのトップ３のトレッキング地域の一つです。

しかし、この地域は地震、雪崩、落石、洪水、その他の気候変動関連の影響など、多くの災害の危険性にさらされています。ランタン地域は、2015年のゴルカ地震によってネパールで最も被害を受けた地域の一つです。この地震による地滑りや大規模な岩・氷雪崩が発生し、ランタン村下部の集落が全て消失しました。また、周辺の村々の他の家屋なども雪崩により破壊されました。この地震はランタンで350人以上、国立公園周辺の村々で合計661人以上の死亡者をもたらしました。ティーハウスのほぼ全てが破壊され、地域の生活と観光産業は長期間にわたって混乱しました。現在も同様の災害のリスクが残り、備えを改善するための研究と行動が必要性を増しています。

母と一緒に２週間のトレッキングに行き、データを収集しました。ランタン谷トレックは、経験豊富なトレッカーにも初心者にも適しています。通常７～10日で完了し、おすすめの時期は秋（９月～11月）です。ただし、昨年私たちが行った時はモンスーンが遅れて９月末まで続いたため、残念ながら天候は完全には晴れず、夜間の雨や午後の曇りが頻繁にありました。カトマンズからシェールブベシまで８時間の山岳バスの旅から始まりました。この町はトレックの出発点です。シェールブベシからは、シェルパガオンのルートをたどり、密集した森林を通り、ランタン川の吊り橋を渡りました。ネパールの多くのトレッキングエリアを訪れたことがありますが、これほど速く流れる川を目にしたことはありませんでした。

ゴダタベラまで登ると、谷が開け、両側にそびえ立つ崖とアルパインの牧草地が茂みを置き換えました。野生の花々、滝、放牧中のヤク、はためく祈りの旗、そして壮大なランタン山脈が、風景をシャングリラ（地上の楽園）のように感じさせました。

ランタン村に到着した時は感動的な体験でした。ゴンパダンダを越えると、2015年の雪崩で谷が破壊された広大で荒涼とした場所を通りました。その壊滅の規模は想像を超えるものでした。記念碑の場所では敬意を表し、亡くなった人々の名前が石に刻まれた“マニ”壁に沿って歩きました―それは悲劇を思い出させる胸が痛む体験でした。

旅はさらにキャンジンゴンパへ続きました。この静かな村は標高3,870メートルに位置し、トレックのハイライトとなる場所です。村はそびえ立つ山々や氷河に囲まれ、

2015年の地震と雪崩の影響を受けたランタン村周辺の風景

ランタン村の再建された家屋と背後の山々

キャンジンゴンパ村の美しい朝

ツェルコリへの道中で見られる山々

地元の儀式に参加

シンプルなダルバートの食事

美しい景色とサイドハイキングを提供します。その中にはキャンジンリやツェルコリへの登山も含まれます。母と私はツェルコリ（5,033メートル）への10時間の厳しいトレックに挑戦しました。厳しいものでしたが、ランタン山脈のパノラマの景色がその一歩一歩を価値あるものにしてくれました。そびえ立つ山々の中で母と静かにお茶を共有した時間は、かけがえのない思い出となりました。

自然の美しさに加えて、この地域は文化的にも非常に豊かです。この地域の住民の大多数はヒョルモ族とタマン族で、チベット仏教を信仰しています。彼らの文化は非常に豊かで独特であり、年間を通じて多くの儀式や祝祭が行われています。地元の祝祭に参加し、ティーハウスでの“ダルバート”の食事を共にし、暖炉のそばで温かいお茶を飲むことは、言葉では表現しきれないつながりと温かさをもたらしました。

全体で私たちは毎日約８時間トレッキングしながら、ティーハウスのオーナーたちに地震備えについてのインタビューを行いました。ティーハウスのオーナーたちは、2015年のゴルカ地震の際の胸が張り裂けるような経験を共有し、それがどのように彼らの生活や生計に影響を与えたかを語ってくれました。多くの人が家族、家、ビジネスを失い、その出来事のトラウマがコミュニティに未だ残っています。

調査の結果、この地域の全体的な備えは依然として低いことが明らかになりました。緊急避難バッグ、訓練と演習、リスクコミュニケーションシステムといった基本的で重要な対策がほとんど欠如していました。さらに、地域の備えは認知的、社会的、社会経済的な要因の組み合わせに影響されていることも分かりました。積極的な要因としては、地域の知識、伝統的な慣習、家族の安全や自立への重視、訪問者の影響が含まれます。また、過去の災害経験がいくつかの備えの戦略を発展させるのに役立っていました。しかし、経験だけでは十分ではありませんでした。災害や備えに対する否定的な信念、忘却、社会的および文化的規範、社会経済的障壁、知識の欠如、機関への不信など、さまざまな要因が地域の備えを改善する上で重要な障壁となっていました。

この旅を通じて、体力的な挑戦、自然の美しさ、文化的な没入、そして温かいおもてなしが、全ての瞬間を忘れられないものにしてくれました。ランタン谷トレックは単なるトレッキング以上のものでした―ランタンの強く美しい人々のおかげです。2015年の地震の悲劇的な出来事を母と私に再び話してくれた彼らの勇気は、非常に謙虚な体験でした。ランタンで過ごした２週間は、私の人生に深い影響を与えてくれました。この旅を通じて、人生の喜び、または小さなことにも感謝する大切さを思い出しました。信頼と温かいおもてなし、そして貴重な物語を通じて、私の研究に豊かさを加えてくださったことに感謝します。この美しい地に、皆さんにもぜひ訪れていただきたいと思います。

ママと一緒にツェルコリ頂上での記念写真

フォーカスグループ終了後の写真

（担当：令和６年度竜の子奨学生　立命館アジア太平洋大学　バル タマン アンウロデ）

SPECIAL REPORT Ⅱ

中国のライブコマース

去年３月ごろ帰国した際に、母がスマートフォンでライブ配信を見ながら、何やら商品を購入している姿を目撃しました。私はその光景が珍しく、母に尋ねたところ、「これが今の中国のネットショッピングで一般的な手法だよ」と教えてもらいました。中国の淘宝（タオバオ）や抖音（TikTokの中国版）などのプラットフォームで行われるライブコマースが、今では商売の重要な手段になっているのだそうです。私はその背景や仕組みについて興味が湧き、中国のライブコマースを調べてみることにしました。

ライブコマースは、オンラインショッピングとライブ配信を融合させた新しい形態の商取引です。中国では、特に淘宝や抖音を中心に、急速に普及してきました。図２にライブコマースの購入までの流を示します。簡単に言えば、売り手がリアルタイムで商品の紹介を行い、視聴者はその配信を見ながら直接購入できる仕組みです。例えば、販売者がカメラの前で洋服を試着して見せ、その素材感やサイズ感をリアルタイムで解説します。その間に視聴者はチャットで質問を送り、販売者がその場で答えるなど、インタラクティブな要素が特徴です。

中国では、若者だけでなく、全世代にわたってライブコマースが浸透しています。特に、ライブ配信を通じて商品を紹介するインフルエンサーの影響力が非常に強いです。例えば、中国の有名なインフルエンサーである李佳琦は、ライブコマースの象徴的な存在です。彼は「口紅の王子」としても知られ、毎回のライブ配信で大量の口紅を販売していることで有名です。

ライブコマースの人気商品として、アパレル、食品、コスメなどが挙げられます。図３は中国のインターネット利用者を対象にした、ライブコマースで購入したことがある商品に関するアンケート結果です[(1)]。図に示すように、中国のライブコマースでは幅広い商品を取り扱っていることが分かります。

また、中国ライブコマースの市場規模について調べたところ、その規模が急増していることが分かりました。

図1．ライブコマースのイメージ©photoAC

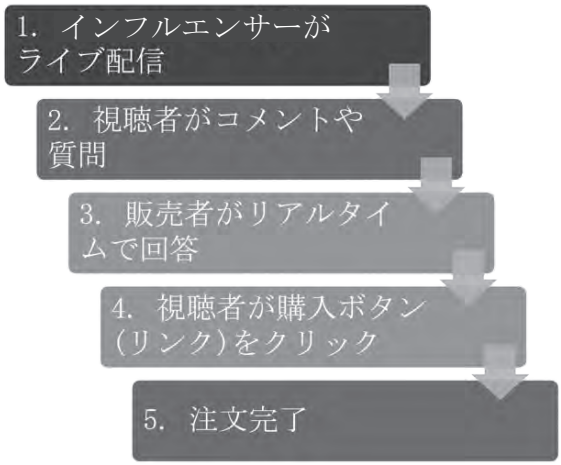


図2．購入までの流れ

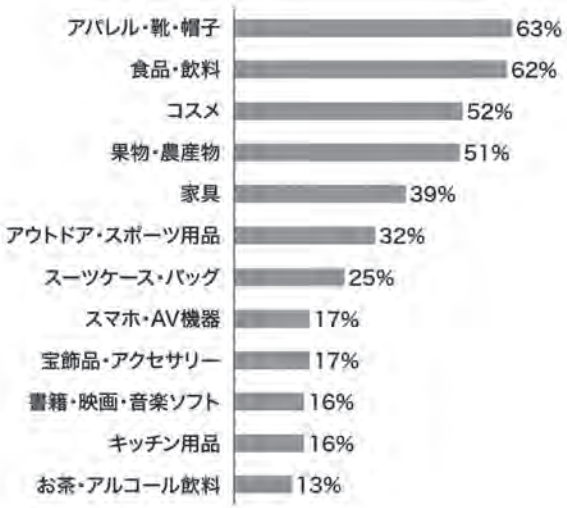
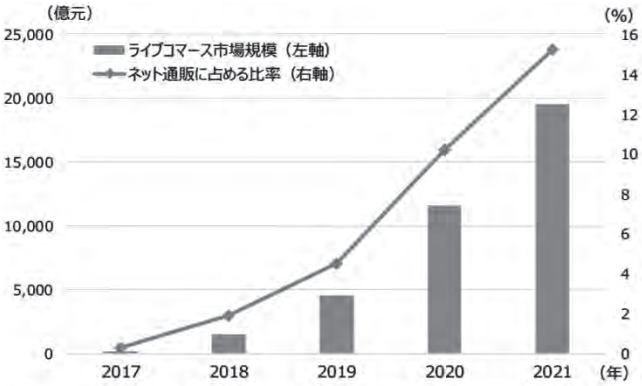


図3．ライブコマースで購入したことがある商品[(1)]

Iresarchのデータによると、2020年には17兆638億円の市場規模を達成し、2025年には100兆円を超えると予想されています[2]。図４に中国ライブコマースの市場規模遷移を示します。ライブコマースの市場規模とネット通販に占める比率が右肩上がりに上昇していることがわかります。



出所：Iresearch「中国ライブコマース2020年」を基に三井物産戦略研究所作成

図4．ライブコマースの市場規模[2]

では、なぜ中国で人気があるのか。中国でライブコマースがここまで広まった背景には、以下の要因があると私は考えました。

1．インターネット環境が非常に整備されており、スマートフォンを使って簡単にライブ配信を見ることができることが大きな要因です。

2．中国の消費者が商品について詳しく知りたい、納得してから買いたいという意識が強い傾向があります。ライブコマースでは、リアルタイムでインフルエンサーや販売者とやり取りできるため、商品の詳細や疑問点をその場で解決できるのが大きな魅力です。例えば、「このスキンケア商品は敏感肌でも使えるのか？」といった質問にその場で答えてもらえることで、信頼感を生み出します。

3．ライブ配信中に特別な割引や限定商品を提供することが、購買意欲をさらに刺激します。これにより、視聴者は「今買わなければ損をする」と感じ、即座に購入の決断を下すことができるのです。

4．中国の消費者文化では、買い物自体が娯楽として楽しめる活動とみなされています。ライブ配信は、商品の説明だけでなく、視聴者を楽しませるトークやパフォーマンスが含まれており、単なるショッピングの枠を超えたエンターテイメントとして親しまれています。

では日本のライブコマースはどうでしょう。日本のオンラインショッピングも非常に活発で、Amazonや楽天、Yahoo!ショッピングなどが主流となっています。しかし、ライブコマース文化が浸透しているとは言い難いです。日本でもインフルエンサーやyoutuberが商品を紹介することはありますが、それは基本的に商品レビューの形式が主流であり、視聴者がその場で購入するという形はあまり見られません。日本のオンラインショッピングでは、商品の詳細情報やレビューを見て購入する形が一般的ですが、中国のライブコマースでは、販売者とリアルタイムでやり取りをしながら商品を選ぶため、購入に対する不安を即座に解消できる点が大きな違いです。

中国で一般的になりつつあるライブコマースですが、今後は日本でもライブコマースが広がる可能性があると思います。日本の文化や消費者の購買傾向を考慮すると、インフルエンサーを中心にしたライブ配信型のショッピングは、ファッションや美容、ガジェットなど特定の分野では特に受け入れられるかもしれません。特に、商品の体験や魅力を直に感じてもらうことができるため、視覚的要素が強い商品ほどライブコマースと相性が良いと感じます。

中国のライブコマースは、単なるショッピング手段にとどまらず、エンターテイメントと消費が融合した新しい形態の商業活動を生み出しました。日本でも、こうした新しい形態のショッピングが今後広がる可能性を考えると、非常に興味深いです。私は、この現象が日本にも浸透していく過程を楽しみにしています。

参考資料：

（１）itsumo.inc.,「中国・米国のライブコマース市場規模」, https://itsumo365.co.jp/blog/post-22274/?utm_source=chatgpt.com

（２）クロスボーダーネクスト,「【2024年】中国ライブコマースを徹底解説！事例や市場規模、インフルエンサーKOL活用する方法とは？」, https://www.cbn.co.jp/archives/29384/trackback

（担当：令和５年度竜の子奨学生　東京電機大学　戚 涵欽）

寄付者のご紹介
【株式会社ジェイマークス 代表取締役　秋元 隆弥 様】【帝京大学 経済学部　准教授　朴 敬玉 様】

編集後記

編集委員の皆様、お疲れ様でした。

委員長　東京工業大学　金 栄牛

会報誌第34号の編集委員長を務めさせていただきました。皆様といろいろと意見交換して会報誌を完成させていく過程は非常に楽しく、貴重な経験でした。大切な記事を執筆してくださった皆様に感謝いたします。そして、こんなに魅力的な記事を会報誌に掲載できたのは、毎日のようにラインやメールでコミュニケーションを取りながら、会報誌を完成させようと努力した編集委員の皆さん、そしてプロの目線からアドバイスをくださった編集スタッフの方のおかげです。ありがとうございました。
皆様に楽しく読んでいただくことを願っております。最後に、素晴らしい機会を与えてくださった竜の子財団に感謝申し上げます。

委員　東京電機大学　戚 涵欽

今回の会報誌では、SPレポートⅡの執筆を担当しました。就職活動に集中していたこともあり、十分な時間をかけて執筆できなかったのが心残りですが、それでも皆さんに楽しんで読んでいただけますと嬉しいです。会議ではレポートについて多くのアドバイスをいただき、コミュニケーションの大切さを改めて実感しました。編集委員の皆様には本当に感謝しています。最後に、貴重な会報誌制作の機会をくださった竜の子財団の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

委員　一橋大学　宋 兆

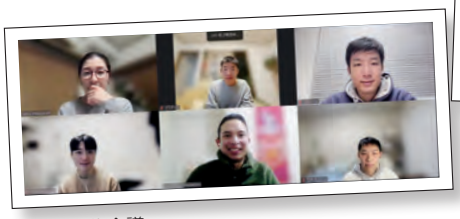
この度、竜の子財団会報誌第34号の編集委員として参加しました。会報誌の委員として編集を参加するのは２回目でした。１回目はSPレポートの担当で、皆さんに自国の文化を伝えることができてとても貴重な経験となりました。今回私の担当部分は、交流会レポートの前半です。竜の子財団の皆さんとの旅を思い出しながら、交流会レポートを書いて、とても楽しかったです。会報誌の編集を通じてとても貴重な経験、思い出が得られました。編集委員の皆様と竜の子財団の皆様に心より感謝いたします。

委員　名古屋大学　叶 楷文

このたびは編集委員会に参加させていただき、本当にありがとうございました。
私は第47回交流会報告の後半部分を担当しました。書いているうちに、皆さんと一緒に九州を旅行した思い出がよみがえり、とても楽しかったことを改めて感じました。
皆さんと一緒に協力し、交流しながら作業できたことも、とても楽しかったです。編集の途中で、委員会の皆さんにたくさん助けていただき、丁寧に教えていただきまして、心より感謝申し上げます。今回の編集作業は、私にとって貴重な経験となりました。

委員　立命館アジア太平洋大学　バル タマン アンウロデ

今回、初めて編集委員を務め、SPレポートⅠを担当しました。
長い間、日本語での長文レポートを書く機会がなかったため、執筆作業はやや難しく感じましたが、それ以上に非常に貴重な経験となりました。
執筆だけでなく、他の編集委員の皆さんとの議論も大いに楽しむことができました。こうした意見交換を通じて、多くを学び、成長する良い機会になったと感じています。
また、会議の後に皆さんと一緒に食事に行けたことも、とても嬉しかったです。近況を共有し合いながら、より一層絆を深める素晴らしい機会となりました。


第一回編集会議

第二回編集会議

第三回編集会議

第二回編集会議後

「その夢はきっと世界を変えていく」

作詞：竜の子奨学生
作曲：班　文林（平成21年竜の子奨学生）

夢　希望をかなえる為　僕たちは生きている
その夢はきっと世界を変えていく　平和のため
いろんな事があるけれども　どんなときでも
仲間とともに乗り越えて　竜の子の誇りを胸に
夢　希望をかなえる為　みんなは生きている
その夢はきっと世界を変えていく　かならず

竜の子奨学生 第34号
2025年３月19日発行　公益財団法人 竜の子財団
〒160-0022 東京都新宿区新宿三丁目1番24号 京王新宿三丁目ビル2階　TEL.03-5367-2002　FAX.03-5367-2155
URL：http://www.tatsunoko.jp/

VEGETABLE OIL INK